

芽は伸びる

小川未明

青空文庫

泉^{いずみ}は、自分^{じぶん}のかいこが、ぐんぐん大き^{おお}くなるのを自慢^{じまん}していました。にやりにやり、と笑^{わら}いながら、話^{はなし}を聞^きいていた戸田^{とだ}は、自分^{ぶん}のもそれくらいになつたと思^{おも}つていたので、おどろきはしなかつたが、誠^{せい}一^{いち}は、ひとり感^{かん}心^{しん}していました。お母^{かあ}さんが、きらいでなければ、自分^{じぶん}もかいこを飼^かいたいのです。なんでお母^{かあ}さんは、あんな虫^{むし}が怖^{こわ}いのだろう。お母^{かあ}さんや、妹^{いもうと}が、かわいい顔^{かお}をしているかいこを、気味^{きみ}わるがつているのが、不思議^{ふしぎ}でたまらなかつたのであります。そこへ、ちようど理^り科^かの長田^{おさだ}先生^{せんせい}が通^{とお}り

かかられました。

「君たち、なにをしているね。」と、みんなの顔を見て笑っていられたのです。

「おかいこの話をしていたのです。先生、僕のおかいは大きくなりました。」と、泉が、いいました。

「そうか、学校のと、どっちがいい繭を造るかな。」

「競争するといいや。」と、戸田がいました。

「君も、飼っているのかね。」

「飼っています。」

ひとり誠一がだまっているので、先生は誠一の顔をぐらんに
なつて、

「南、おまえは。」と、お聞きになりました。

誠一は、こないだ先生がみんなにかいこを飼つてみるようにおすすめなさつたのを覚えています。自分だけ飼わぬと答えるのは、なんだか理科に対して、不熱心に思われはせぬかと考えたので、

「僕、かいこを飼いたいのですけれど、かいこがないのです。」
 といいました。

「ほんとうに飼うなら、学校のを四、五匹あげよう。あとからきたまえ。」といって、先生は、誠一の頭をぐりぐりとなでて、彼方へいってしまわれました。三人は先生の後を見送つていましたが、たがいに心の中でやさしい先生だと思つたに、ちがひ

ありません。

「じゃ、みんなで、競争きょうそうしようか。」と、泉いずみが、いいました。

「いいとも。」と、戸田とだが、答えこたました。

まったく経験けいけんのない、そして、どうするかも知らない誠一せいは、すぐに返事へんじができなかったのです。

誠一せいは、

「むずかしいだろうね。」と、心こころもとなさそうに、いいました。

「僕ぼく、よく教おしえてあげるよ。お菓子かしの空あき箱ぼこと、あとでわらがあればいいんだよ。」と、戸田とだが、勇気ゆうきづけてくれました。

「それに、桑くわの葉はがないのだが。」

「桑くわの葉はなら、僕ぼく、明日あした学がっ校こうへ持もってきてあげる。びんの中なかへ

水みづを入れてさしておきたまえ。」と、泉いずみが、教おしえました。

二一

誠せい一は、先せん生せいが、大おおきな桑くわの葉はの上うえへ、かかいこを七ひ匹きばかり、のせて渡わたしてくだされたのをありがたくいただきました。さあこれをどうして持もって帰かえったらいいだろう。紙かみもなかつたので、葉はの上うえにのせたまま、それを手てのひらで支さえて、そろそろ歩あるいて、学が校こうの門もんから一ひとり人出たのであります。

うすい、白しら雲くもを破やぶつて、日に光っこうはかつと町まちの建た物ものを照てらし
ていました。車くるまが通とおります。自じ転てん車しゃが走はしつていきます。そのあ

わたましい景色けしきに心こころを奪うばわれるでもなく、誠一せいは、ゆつくり、ゆつくり、おかいこを見守まもりながら、道みちを歩あるいてきました。町まちの人ひととびと々とは、なんだろうと思おもって、誠一せいの手てをのぞくものもありました。

「やあい、おかいこをあんなことして持もっていくやあい。」と、笑わらっている子供こどももありました。いつもなら、十五分ふんぐらいで帰かえれるのに、三十分ふんあまりもかかって、やっと我が家わがやの門もんが目めにはいっただのです。

「お母かあさんが、いけないといつて、しかりはしないかなあ。」と、誠一せいは、ちよつと心配しんぱいになりました。

「誠せいちゃん、たいそうおそかったですね。」

お母^{かあ}さんは、そうおつしやいました。

「先生^{せんせい}から、おかいこをもらつてきたのだよ。」

誠^{せい}一^{いち}は、先生^{せんせい}からといつたら、お母^{かあ}さんは、許^{ゆる}してくださいりはしないかと思^{おも}つて、先生^{せんせい}という語^ごに力^{ちから}を入^いれたのです。

「お母^{かあ}さんは、はだか虫^{むし}がきらいなのを知^しつていますでしょう。なんでそんなものをもらつてきたのですか。」と、お母^{かあ}さんは、おつしやいました。

「生^き糸^{いと}は、日^に本^{っぽん}の大事^{だいじ}な産^{さん}業^{ぎよう}だつて、それで先^{せん}生^{せい}がみんなに飼^かつてごらんとおつしやつたのです。かいこはちつともこわくもなんともないのに、お母^{かあ}さんがこわがるのは、お母^{かあ}さんが、よわ虫^{むし}だからだろう。」と、誠^{せい}一^{いち}が、いいました。

「ほんとうにそうですね。じゃ、私の目につかないところに置いておくれ。」

誠一は、お母さんがそういつたので、いくらか安心しましたが、おかいこをどこへ置いたらいいだろう。

「お母さんの目につかないところって、どこかなあ。」

妹といっしょに勉強するへやに置くことはできませんでした。妹がやはりお母さんと同じく、虫がきらいだからです。

「物置にしようか、あすこは、暗くて、風がよく通らないし。」と、考えているところへ、学校で約束した、戸田がやってきました。

「先生からいただいたおかいこをお見せよ。」

「こんなんだ。」

誠一は、もうしおれかかった桑の葉の上につけているかいこを見せました。

「大きいんだね。もうじき上がるんじゃない。僕のは、こんなに大きくないよ。」

「先生だから、うまいんだろう。」

「早く、お菓子の空き箱を持っておいでよ。」

誠一は、お菓子の空き箱を出しました。また近所の米屋へ走って行って、わらももらってきました。戸田は、かいこを飼う箱を一つ、まぶしを一つ造ってくれました。

「ここらに、桑の木はないのかい。」

「君のうちにあるの。」

「僕のうちののは、縁日で買ってきた苗木だよ。」

「ここらに桑畑がないんだ。」

「あとで、さがしておいでよ。こう細かくきざんでやるのだ。」

三

戸田が、帰ってしまった後でした。

「誠にやん、こんなところに、おかいこを置いては、かわいそうじゃありませんか。風の通る涼しいところがいいではありませんか。」と、物置へはいつて、石炭を出していられたお母さん

が、かいこの箱はこを見つみけておっしやいました。

「お母かあさんの、見みえないところといっいったんでしよう。」

「あんたのおへやに置おきなさい。」

「みよ子こがいやだというのだもの。」

「あの子こも、私わたしににたのですね。そんならお座敷ざしきに置おきなさい。」

「え、お座敷ざしきに置おいていいの。」

「ちらかさないように、下したになにか敷しいてね。」

お母かあさんが、そうおっしやると、誠せい一はうれしかったのです。

やはりお母かあさんは、やさしいなと感かんじたのです。

門もんの外そとへ出でると、西にしの空そらが赤あかあか々としていました。とみ子こさん

や、よし子こさんや、勇ゆうちゃんたちが、遊あそんでいました。

「どこかに、桑の木がないか知らない。」

「おかいこにやるの。」

「うん、先生から、おかいこをもらってきたけれど、桑の葉がなくて困っているのだ。」

「僕に見せておくれよ。」と、勇ちゃんが、いいました。

「私、知っているわ。原っぱにあつてよ。」と、とみ子さんが、いいました。

「どこの原っぱに。」

「土管の置いてある、原っぱに。」

「ほんとう。僕、桑の木なんか見なかったがなあ。」

「あつてよ。おしえてあげましょうか。」と、とみ子さんは、真

つ先さきになつて、原はらっぱの方ほうへ駈かけ出だしました。あとからみんながつづいたのです。

原はらっぱの片かたすみの方ほうは、草くさの茂しげつたやぶになつていました。そこへは、近きん所じよの人ひとたちが、よく空あき俵だわらや、ごみなどを捨すてるのです。そのやぶの中なかをさして、

「ほら、あの木きがそうよ。」と、とみ子こさんがいいました。そこには、青あお々あおとした、一ほん本きの木きが、夕ゆう日ひの光ひかりを浴あびていました。

「あれ、桑くわの木きかしらん。」

「そうよ。」

誠せい一いちは、やぶの中なかへはいつていきました。いつか、ここで、ねこが子こを産うんだことがあります。

「ねこが、ここで子を産んだね。」

「あのねこは、死んじやつたよ。」と、勇ちやんが、いいました。誠一は、白と黒の、あわれなねこの姿が目に浮かんだのでした。彼の後について勇ちやんも、とみ子ちゃんも、よし子さんもはいつてきたのです。

「ほんとうに、桑の木だ。」

「赤い実がなっているわ。」

「ここにも。」

みんなが、わあわあいつていると、すぐあちらの家のおばさんが、生垣の間から、こちらをのぞいて、

「みんな葉をとらないでください。私の家にも、おかいこがあり

ますからね。」といたしました。

こんなにかくさん葉はがあるのにとおもつて、誠せい一は、へんな氣持きもちがしたが、

「すこししか、とりませんよ。」と、答こたえました。子供こどもたちは、また、草くさを分わけて、原はらっぱの広ひろ々としたところへもどると、

「いやなおばさんだね。」と、とみ子こさんが、いいました。

「やな、ばばあだな。」と、勇ゆうちゃんが、いつて、みんなは、赤あかい屋根やねを見上みあげました。

四

翌日、学校へいくと、泉はしんせつにびんの中へ桑の枝をさして、持つてきてくれました。

「こんど、僕の家へ取りにおいでよ。自転車に乗ってくれば、わけがないだろう。」といいました。

その桑の葉はつやつやとして、色が黒く、厚くて、ほんとうにうまそうです。こんな葉を食べているおかいこは、きつとよくふとつているだろう。そして、いい繭を造るにちがいない。競

争は、泉の勝ちかもしれない、誠一は思いました。

学校の帰り道で、戸田といっしょになったのです。

「君のところの桑の葉も、こんなに大きくなって、おいしそうかい。」と、誠一は、たずねました。

「まだ、木きが小ちいさいからね。」

「僕ぼくは、原はらっぱに生はえている桑くわの木きの葉はを取とってきたけれど、かたくて、おいしくなさそうだ。」

「それは、こやしを、やらないからだよ。」

「これは、こやしがきいているんだね。」

「そうさ。」と、戸田とだは、なぜかくすくす笑わらいました。

「僕ぼく、毎まい朝あさ、自じてん転しや車やにのつて、もらいにいいこうかな。」

「泉いづみの家いえの前まえは、桑くわ畑ばたけなんだぜ。だから、すこしばかり取とつ

たつて、かまわないのさ。」

「泉いづみの家いえから、火葬場かそうばが近ちかいんだってね。」と、誠せい一いが聞ききました。

「だから桑くわの木きのこやしに火葬場かそうばの灰はいをやるんだよ。」

「えつ、火葬場かそうばの灰はいをやるの。」

「いつてみたまえ、根ねのところしろが白しろくなつてゐるから。」

「僕ぼく、もういくのをよした。」

「どうして。」

「だって、気味きみがわるいもの。」

誠せい一いちには、手てに持もつてゐる桑くわの葉はの光ひかりが、急きゆうに普通ふつうとちがつて

いるように感かんじられたのです。その葉はは捨すてなかつたけれど、そ

れからは、やはり原はらっぱへいつて、桑くわの葉はを取とつてきました。

ある日ひ、やぶのところとおで、十とおばかりの女おんなの子こと、八はちつばかりの

男おとこの子こが、桑くわの木きの方ほうに向むかつて立たつていました。とんぼを捕とる

のでもなければ、また、きちきちを捕るようなようすもなかったのです。

「なにしているの。」と、不思議に思つて、誠一は、聞きました。
「桑の葉を取りにきたの。」

「どこから。」

「私の家は、あの赤い屋根のお家よ。」

誠一は、いつかみんな葉を取つてはいけなといった、おばさんの家だと思ひました。

「おかいこをたくさん飼っているの。」

「五十匹ばかりいるの。」

「たくさんいるんだね。」

「もう、そろそろ上がりかけているわ。」

「早いなあ、僕も桑の葉を取りにきたのさ。」と、誠一がいうと、
「大きなへびがいるよ。」と、男の子が、いいました。

「どこに？」と、誠一はびつくりしました。

「私が、学校の帰りにここを通ると、大きなへびがあすこへは
いつていつたのよ。」

女の子が、そういうのを聞いて、誠一もおそろしくなりました。
桑の木を見れば、摘んでも、摘んでも、伸びる若芽が、風の吹く
たびになよなよとかがやいています。その葉の間から、白い枝が
見えるのが、なんだかへびのからんでいるようにも見えたのであ
ります。誠一は、石や、土くれを拾って、やぶを目あてに投げて

いました。こうすれば、へびがおどろいてどこへか姿をかくすからでした。

「お姉ちゃん、帰ろうよ。」

「僕が、取つてあげるから待つておいで。」

誠一は、勇気を出して、草を分けては行っていきました。桑の枝を折ろうとすると、熟しきつた赤い実が、ぽとぽと落ちました。

「さあ、これを持ってお帰り。」

誠一は、桑の枝を女の子の手に渡してやったのです。

五

朝早く起きた誠一は、いつになく忙しそうでした。かいこが、いよいよ上がりかけたのです。学校へいつてしまった後で、お母さんがおへやへはいつてみると、手紙が置いてありました。「まあ、なんででしょうか。」と、お母さんは、笑いながら、開けてごらんになりました。

「お母さん、おかいこが口から糸を出したら、まぶしに入れてください。まぶしに入れたのには、桑をやらなくてください。糸を出さないほかのには、桑の葉を細かくきざんでやってください。誠一より。」

お母さんは虫はきらいでしたけれど、子供のためには、怖いと

も思おもわず、なんでもしてやる気きになりました。そして、おかい
この前まえへ行って、一つ、一つ、しらべていられました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

※表題は底本では、「芽《め》は伸《の》《びる》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年4月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

芽は伸びる

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>